

日本における中学・高校生の第2外国語としての スペイン語学習ストラテジー

大学院国際文化研究科博士前期課程 横山 友里

1. 背景

外国語学習において、自律学習を学習者自らが行うことは、近年、文部科学省の小・中・高等学校新学習指導要領で示された「生きる力」のように、基礎的な知識を習得し、それらを活用して自ら考える力をつけるために重要である。自律学習とは、学習者自身が、自らの学習を管理し自主的に学習を効率的に行うことである。この自らの学習を管理するということは、使用する学習方法を認識することであり、つまり自らの学習、学習ストラテジーを学習者自身が認識し、自律的に活用することが重要である。

学習ストラテジーとは、学習者自らが習得をより効果的にするため、また新しい情報を学習するために行う一連の思考や行動のことであり、この学習ストラテジーを活用することにより、効果的な外国語の学習、さらにそれらを活用して自ら考える力を身につけることが可能になると考えられている。一方、教育の側面からみても、学習者自身がより効果的に学習ストラテジーを使用するには、現時点での彼らの使用している学習ストラテジーを認識することが重要である。また、従来の学習ストラテジー研究では、学習者要因をベースに、学習者の使用するストラテジーを検討している。例えば、海外経験の有無といった学習者要因が、学習者の使用する学習ストラテジーにどのような影響を与えるのかといった研究が行われてきたが(木村 2007)、これらの研究の研究結果からは統一した見解は得られていない。Wen& Johnson (1997)では、学習者要因も、ある特定の一要因のみに焦点をあてるのではなく、様々な要因が体系化して言語習得に影響を与えているとし、複数の要因が直接的に学習達成度に影響を与えているとした。

学習ストラテジーは研究者によって様々に定義されるが、その中でも Oxford (1990)の定義とそれを用いて作成された質問紙 SILL (Strategy Inventory for Language Learning)が、信頼性に定評があり(小嶋・廣森・尾関 2010)、SILL を用いた研究も数が多いとして注目されている。この SILL を用いた研究は、英語学習者で大学生を調査対象としたもの、日本語を第2言語として学習する学習者を対象とした研究が多い(英保 2006;木村 2007)。

また近年では、学習ストラテジーをただの単体の学習方法として捉えるよりは、心理・社会認知・社会文化的な視点をも考慮した総合的な学習方法としてとらえ、研究が行われるようになってきた。具体的には、Oxford は総合的な学習ストラテジーを S2R モデル(Strategic Self-Regulation Model of language learning)として提唱している(Oxford 2011)。S2R モデルとは、自律学習には、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会文化的インタラクティブストラテジーが重要な役割を果たしているとし、今までの学習ストラテジー研究を包括したモデルである。ストラテジーを相互に関連しあうものとして捉え、ストラテジーを互いに関係し合う 3 つの

歯車のような集まりに例えている。そしてそれぞれの歯車であるストラテジーを円滑に使用するため、各ストラテジーの使用を助けるものとして、それぞれメタ認知ストラテジー、メタ情意ストラテジー、メタ社会文化的インタラクティブストラテジーが存在する。Oxford は、学習者はこのモデルを使うことで自らの学習をコントロールでき、より学習を効果的に行うことができると提案した。このように、学習ストラテジーは、単なる1つの学習方法なのではなく、学習者の様々な要因が総合的に絡み合った学習方法なのである。

このように学習ストラテジーや外国語学習についての研究は進んでおり、日本におけるスペイン語教育研究の重要性も高まっている。後藤・石井・浜・岩村(2010)は、スペイン語教育は、「1990年代以降、徐々にではあるが、高校において学習できる機会が増えており、重要性も高まっている」(p.45)とも述べている。しかし日本における中学・高校のスペイン語教育については先行研究がほとんどみられない。後藤他(2010)も、「高校でのスペイン語教育事情に特化した研究は、およそ皆無であるといっても過言ではない」(p.46)と述べている。特に学習ストラテジーに関しては、筆者の探しえた限りでは、齋藤(2008, 2009)、Gallego(2006)のみである。齋藤(2008)も、スペイン語学習者のストラテジーは実証的研究がほとんど行われていないと述べている。齋藤(2008, 2009)はスペイン語学習者の実態を研究した第一段階としては価値が高く、また英語学習の際の学習ストラテジーとの比較も行われている。現在の日本における学校言語教育では、英語をまず学習し、その後スペイン語を学習するというケースがほとんどでありスペイン語学習者の学習ストラテジーを考察するには、英語学習の実態も知る必要がある。しかし、これまでの先行研究では、学習ストラテジーを、内面を重視するよりは、単体の学習方法としての学習ストラテジーを重視した捉え方をしてきた。また、齋藤(2008, 2009)、Gallego(2006)では調査対象が大学生であり、日本における中学・高校生を対象とした研究は筆者の知る限りでは存在しない。

中学・高校生を対象とした総合的な学習ストラテジーを明らかにする研究は、Hiromori が考察しているように、学習ストラテジーを適切に指導することで、学習者の動機づけも高まる(Hiromori 2004)ことや、朴(2010)が指摘しているように、学習ストラテジーの早期指導は重要であることから、必要である。本研究ではスペイン語学習者の学習ストラテジーの実態を明らかにし、今後のスペイン語教育における自律学習を促進しうる学習ストラテジーを身につけるための教育プログラムの構築に寄与する知見を得ることを目的とする。

2. 研究の目的

本研究では、スペイン語学習者の使用する学習ストラテジーの全体の傾向をつかむことを第1の目的とする。その際にスペイン語学習者の使用する学習ストラテジー傾向を自律学習に注目して検討する。第2の目的として、学習ストラテジーと動機付けについても検討する。そして、第3の目的として、現在の日本の学校言語教育の実態を踏まえ、英語学習ストラテジーとの比較を行う。日本においてスペイン語学習者は必ず、スペイン語を学習する以前に、英語を学習した経験を持っているため、英語学習の際の学習ストラテジーとの比較を行う。英語学習の際の学習ストラテジーとの比較をすることにより、スペイン語学習時特有の学習ストラテジーの特徴を検討するためである。最後に学習ストラテジーを総合的な視点からとらえ、分析を行い、スペイン語学習者の使用する学習ストラテジーの全体像を検討する。

3. 研究方法

3.1. 質問紙

3.1.1. 学習ストラテジー

学習ストラテジーを測る尺度としては、SILL (Oxford1990)、Dornyei (2010)などがあるが、先行研究においても使用頻度が高いSILLの日本版である「言語学習ストラテジー調査」(宍戸・伴訳 1994)を使用した。なお、調査対象が中学生・高校生であるため、例えば「覚えやすいように文の中で新語を使う」を「覚えやすいように文の中で新しく覚えた単語を使ってみる」のように文体を平易に変更して質問紙を作成した。質問紙は4つの回答選択肢(全く自分にあてはまる・少しは自分にあてはまる・あまり自分にあてはまらない・全く自分にはあてはまらない)から最もあてはまるものを1つ選んで回答するものである。通常SILLは回答選択肢を5つ設けるが、調査対象が中学・高校生と比較的年齢が低いため、中立的であいまいな回答を避けるために4件法を採用した。調査用紙は、英語学習版とスペイン語学習版の2版を作成した。詳細な質問項目についてはAPPENDIXを参照。

3.1.2. 自律学習

SILL「言語学習のためのストラテジー調査」50問に加えて自律学習をみる尺度として使用されている質問項目8項目を追加した。自律学習尺度に関しては、日本人向けのものとして齋藤(1996)、また広く学習者の心情を測るものとしてHorwitz(1987)などがあるが、佐藤(2006)の作成した尺度が、日本人向けに開発され、質問項目が、教師との関係や、学校での授業に関しての姿勢を問うものが多く、中学・高校生の実情が分かると判断し、採用した。

3.1.3. 学習者要因

加えて学習者要因を特定するアンケート(海外経験の有無、滞在期間、滞在時年齢、通っていた学校、年齢、性別、学習期間、検定の有無)を質問項目の前に実施した。

3.1.4. 動機

スペイン語学習者に対して、「スペイン語を勉強しはじめた理由を教えてください」という学習動機を尋ねる項目を実施した。この項目は自由記述方式である。

3.2. 参加者

調査対象校は、私立中学A校、私立高校A校、公立高校B校の計3校である。そのうちA校は外国人児童と帰国子女を受け入れている中学・高校一貫校であり、B校は海外経験をもつ生徒、いわゆる帰国子女が多い学校である。調査参加者はすべて学校で英語に加え、スペイン語の授業も受けている。また、現在スペイン語を中学または高校で教える学校は、ほぼ共通した特徴として、帰国子女を受け入れている、または国際コースがあるなど国際色豊かな学校が多く、今回の調査対象校も海外経験を持つ生徒が多い。調査対象者は以下の通りである。A 中学・A 高校 海外経験あり、学習言語英語・スペイン語 16名、A 中学・A 高校 海外経験なし、学習言語英語・スペイン語 2名、B 高校 海外経験あり、学習言語英語・スペイン語 6名、B 高校 海外経験なし、学習言語英語・スペイン語 10名。

3.3. 実施年月

2011年2月

3.4. 実施方法

各学校に筆者、もしくは協力者が赴き調査を実施、または事前の打ち合わせ後、調査用紙を郵送して行った。学習者に英語学習時のストラテジー調査とスペイン語学習時のストラテジー調査の両方を依頼、実際に調査校に赴いた場合は、その場で生徒の質問に回答、それ以外でも授業担当教師の監督のもと調査を実施した。

3.5. 調査回収率(有効回答数)

スペイン語学習時と英語学習時のストラテジー調査の2種類をスペイン語学習者に依頼した。依頼件数合計 68 件、回答を途中でやめてしまったもの、英語のみの回答で終わってしまったものを除き有効回答数 63 件、有効回答率は 92.64%である。

3.6. 分析手法

SILL「言語学習ストラテジー調査」の回答と得点記入用ワークシート(宍戸・伴訳 1994、pp.254-257)の結果産出方法に従い、各ストラテジー項目の合計点の平均を算出、比較した。自律学習をみる尺度には、全く自分にあてはまると答えた場合の方が、自律度が低いという逆転項目が含まれており、これらは集計の際に、合計点が高いほど自律度が高くなるように計算しなおした。いずれも 1-4 点で、点数が高いほどストラテジー使用度あるいは自律度が高くなっている。

全体の傾向を見た後、スペイン語学習時と英語学習時の違いを明らかにするため、最も平均値の差の大きい学習ストラテジーの項目を詳細に検討する。

そしてスペイン語を学習しはじめた動機を分析し、学習ストラテジーとの関係を検討する。今回は動機を 4 パターンに分類した。①統合的動機、②内発的動機、③外発的動機、④第二言語を使う理想の自己である。①統合的動機はその言語が話される人々に憧れを持ち、共感を覚え、より仲良くなりたいという動機である。②内発的動機とはその言語を学ぶのが楽しい、その文化や生活についてもっと知りたいという動機である。③外発的動機はその言語を使うことができるの見栄えが良い、仕事や学校、国際社会で必要であるなどの動機である。④第二言語を使う理想の自己とはその言語を使って活躍している自分を思い浮かべる、将来の自分の夢のためにはその言語が必要であるという動機である。分類表は、小嶋他(2010)英語学習における学習動機に関する自己診断表を参考にした。

その後、学習ストラテジーモデル S2R モデルと照らし合わせて検討する。その中でも特に、情意ストラテジー、メタ情意ストラテジーに注目して検討する。情意ストラテジーとは、自分の感情に関するストラテジーであり、外国語を学習する際の自分の感情をコントロールする学習ストラテジー、または失敗を恐れず肯定的な感情を抱きながら外国語学習に取り組むための学習ストラテジーであり、メタ情意ストラテジーとは、その働きを助けるためのストラテジーである。

4. 調査結果

4.1. 全体の傾向

対象とした学習者の学習者要因の結果を表1、表2に示す。

【表 1】

スペイン語学習者学習者要因(N=34)	
変数	
性別(%)	male 26% female 52% 無回答 20%
年齢(Mean)	15.46 歳
海外経験の有無(%)	有 64% 無 35%
滞在期間(Mean)	4.09 年
滞在開始時年齢(Mean)	7.08 歳
滞在終了時年齢(Mean)	10.62 歳
スペイン語学習歴(Mean)	2 年
スペイン語検定合格率(%)	0%
DELE 合格率(%)	0.02% (レベル A1)
滞在国	
アメリカ	12 人
ベトナム	2 人
イギリス	1 人
ドイツ	1 人
オーストラリア	1 人
メキシコ	1 人
シンガポール	1 人
ペルー	1 人
中国	1 人
スペイン	1 人

【表 2】

英語学習者学習者要因(N=29)	
変数	
性別(%)	male 24% female 55% 無回答 20%
年齢(Mean)	15.61 歳
海外経験の有無(%)	有 62% 無 37%
滞在期間(Mean)	3.7 年
滞在開始時年齢(Mean)	7.2 歳
滞在終了時年齢(Mean)	11.15 歳
英語学習歴(Mean)	4.25 年
英語検定合格率(%)	
2 級	17%
3 級	27%

4 級	20%
5 級	13%
6 級	6%
無	24%
滞在国	
アメリカ	10 人
イギリス	1 人
ドイツ	1 人
オーストラリア	1 人
メキシコ	1 人
シンガポール	1 人
ペルー	1 人
中国	1 人
スペイン	1 人

スペイン語学習者は、スペイン語学習歴の平均が 2 年と、中学または高校で学習を始めており、スペイン語検定や、スペイン文部省認定のスペイン語検定所持率はきわめて低かった。また、スペイン語を母語とする国に滞在していた生徒は 3 名であった。

英語学習者は、英語学習歴の平均は 4.25 年、英語検定の所持率は高かった。また英語を母語、公用語とする国に滞在していた生徒は、13 人であった。

4.2. 学習ストラテジーの平均値

スペイン語学習時と英語学習時の学習ストラテジーの平均値を表3に示す。

【表 3】

学習 ストラ テ ジ ー	スペイン語学習		英語学習		平均 値の 差
	N=34		N=29		
	Mean	SD	Mean	SD	
記憶	2.13	0.99	2.53	1.03	0.40
認知	2.08	0.93	2.76	1.01	0.68
補償	2.41	1.08	2.80	1.02	0.39
メタ認知	1.89	0.90	2.71	1.07	0.82
情意	1.80	0.97	2.16	1.05	0.36
社会的	2.47	1.05	2.82	1.09	0.35
自律	2.53	1.04	2.73	0.99	0.20

対象とした学習者は英語を学習する際に、スペイン語を学習する際に比べて学習ストラテジーを多く使い、その中でも、メタ認知ストラテジーの項目に平均値の差が顕著にみられた。

4.3. メタ認知ストラテジーの項目別平均値

メタ認知ストラテジーの質問項目別の平均値を表4に示す。

【表 4】

	スペイン語		英語		平均 値の 差
	N=34		N=29		
	Mean	SD	Mean	SD	
いろいろな方法を見つけて英語（スペイン語）を使うよう心がける	1.91	0.87	2.76	0.99	0.85
自分の英語（スペイン語）の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する	2.50	0.96	3.17	0.97	0.67
他の人が英語（スペイン語）を使っているときは集中する	2.38	0.89	2.90	0.94	0.52
優秀な英語（スペイン語）学習者になるためにはどうしたらよいかを考える	1.50	0.66	2.34	1.01	0.84
スケジュールを立て、英語（スペイン語）の学習に十分な時間をあてる	1.59	0.74	2.41	1.15	0.82
英語（スペイン語）で話しかけることができる人を探す	1.73	0.79	2.41	1.15	0.68
できるだけ英語（スペイン語）で読む機会を探す	1.70	0.97	2.72	1.03	1.02
英語（スペイン語）の能力を高めるための明確な目標がある	1.68	0.77	2.76	1.21	1.08
自分の英語（スペイン語）学習の進歩について考える	2.00	0.92	2.90	1.05	0.90

一番平均値に差がみられたのが、英語（スペイン語）の能力を高めるための明確な目標がある、の項目であった。学習者はスペイン語と比較して、英語に対してより明確な目標があると回答していた。

4.4. スペイン語学習の動機

スペイン語学習者のスペイン語学習をはじめた動機の一覧を表5に示す。

【表 5】

	件数
① 統合的動機	2
② 内発的動機	10
③ 外発的動機	16
④ 二言語を使う理想の自己	1
合計	29

学習者が答えた動機は、外発的動機、内発的動機が全体の9割以上を占めていた。また、学習者は主に外発的動機（実用性、話者の多さなど）をあげることが多かった。

4.5 学習者の使用するストラテジー

スペイン語学習者が使用する学習ストラテジーの上位5位を表6に示す。

【表 6】

順位		分類	Mean	SD
1	私がスペイン語学習で進歩がなかったら先生のせいだと考える(逆転項目)	自律	3.29	0.91
2	知らない単語を理解しようと推測する	補償	2.97	0.81
3	最も効果的な学習方法は先生が知っている(逆転項目)	自律	2.94	0.89
4	話しているとき、スペイン語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう	社会的	2.91	1.03
5	困ったとき、スペイン語のネイティブ・スピーカーに助けを求める	社会的	2.79	1.01

英語学習者が使用する学習ストラテジー上位5位を表7に示す。

【表 7】

順位		分類	Mean	SD
1	私が英語学習で進歩がなかったら先生のせいだと考える(逆転項目)	自律	3.38	0.86
2	英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心がける	認知	3.28	0.84
3	英語のテレビ番組や英語の映画を見る	認知	3.24	0.95
4	知らない単語を理解しようと推測する	補償	3.17	0.80
5	自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する	メタ認知	3.17	0.97

スペイン語学習者が使用する学習ストラテジー下位5位を表8に示す。

【表 8】

順位		分類	Mean	SD
1	スペイン語学習日記をつけて自分の感情を書いている	情意	1.09	0.38
2	スペイン語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す	情意	1.26	0.51
3	優秀なスペイン語学習者になるためにはどうしたらよいかを考える	メタ認知	1.50	0.66
4	スペイン語で適切な語が分からないとき自分で新しい単語を作る	補償	1.53	0.61
5	スペイン語でメモ、メッセージ、手紙、メールを書く	認知	1.53	0.66

英語学習者が使用する学習ストラテジー下位5位を表9に示す。

【表 9】

順位		分類	Mean	SD
1	英語学習日記をつけて自分の感情を書いている	情意	1.38	0.68
2	英語で適切な語が分からないとき自分で新しい単語を作る	補償	1.79	0.94
3	英語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す	情意	1.93	0.90
4	新しい単語を覚えるのにその単語が書いてあった本のページ、黒板などの位置を記憶しておく	記憶	1.97	0.94
5	新しい単語を覚えるのにフラッシュカードを使う	記憶	2.03	1.02

学習者が使用するストラテジー上位の結果は、次の3つの特徴が明らかになった。まず第1にスペイン語学習時には、ネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらい、助けを求める等の学習ストラテジーが多用されていたが、英語学習時には、学習言語そのものを使った学習方法のストラテジーが多用されていたこと、第2に英語学習時では自分自身で学習をより高めるためのストラテジーを使用、つまり明確な目標をもち、自ら自分の学習を省みるストラテジーを使用していたことである。第3には、英語学習、スペイン語学習両方に見られたことだが、私が英語(スペイン語)学習で進歩がなかったら先生のせいだと考えるという項目が英語・スペイン語学習両方とも上位にみられた。これは前述のように、逆転項目であるので、英語学習、スペイン語学習に関わらず、学習者は自分の学習に自分で責任を持ち、ある程度自律した学習が行われているといえよう。

また、学習者が使用しない学習ストラテジーの違いについては、以下の点に相違がみられた。英語学習時において、英語のテレビ番組や英語の映画を見るが第3位と、上位にあるのに対し、スペイン語学習時においてこの項目は、下位9位であった。これは、学習者は英語学習の際にスペイン語学習時よりも、より英語のテレビや映画を見る、ということを示している。また英語で話をしたり、英語でメールのやりとりをしたり、積極的に学習言語である英語を使用し、オーセンティックな教材で学習をしていた。

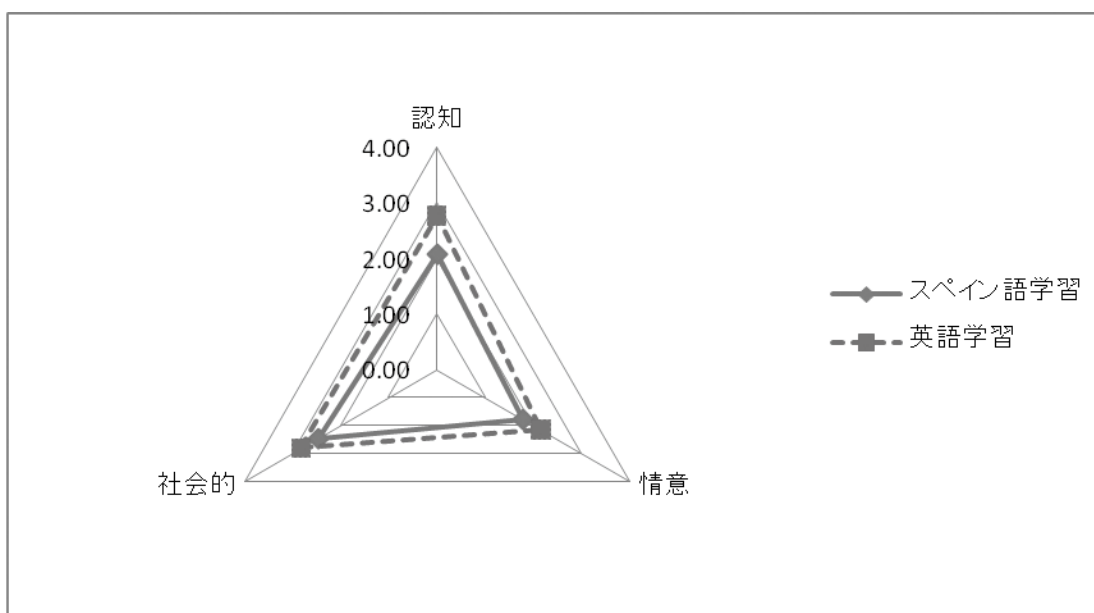
情意ストラテジー項目別平均値を表10に示す。

【表 10】

	英語	スペイン語	全体	平均の差
英語(スペイン語)を使うのに自身がないときは、いつもリラックスするよう心がける	2.21	1.88	2.03	0.32
間違いを恐れず英語(スペイン語)を使うよう自分をはげます	2.66	2.21	2.41	0.45
うまくいったとき、自分をほめる	2.69	2.56	2.62	0.13

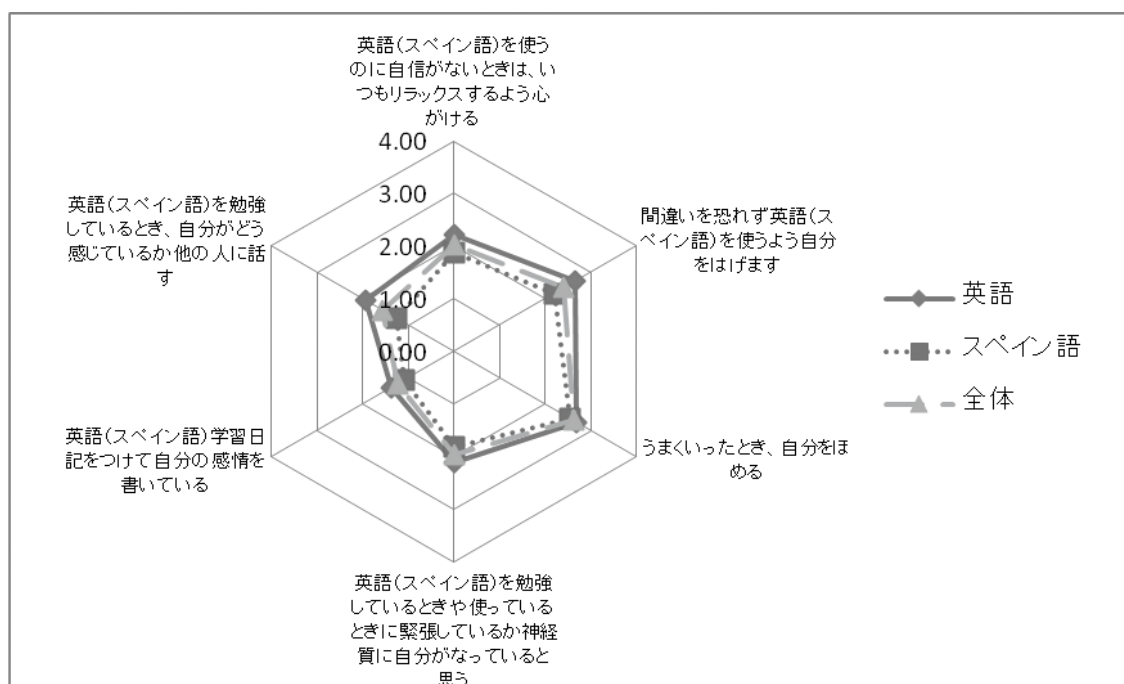
英語(スペイン語)を勉強しているときや使っているときに緊張しているか神経質に自分になっていると思う	2.10	1.82	1.95	0.28
英語(スペイン語)学習日記をつけて自分の感情を書いている	1.38	1.09	1.22	0.29
英語(スペイン語)を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す	1.93	1.26	1.56	0.66

全体(英語学習時とスペイン語学習時をあわせたもの)で多用されるのが、「うまくいったとき、自分をほめる」であった。次は「間違いを恐れず英語(スペイン語)を使うよう自分をはげます」であった。逆に使われない学習戦略は、「英語(スペイン語)学習日記をつけて自分の感情を書いている」、「英語(スペイン語)を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す」という項目であった。



【図1】S2Rモデルから見た戦略

S2Rモデルの3つの戦略をグラフ化した。これは表3の認知戦略、情意戦略、社会的戦略をグラフ化し、スペイン語学習時、英語学習時のそれぞれにおける各戦略の平均点を比較したものである。この図をみると分かるように、情意戦略が英語学習時(Mean=2.16)、スペイン語学習時(Mean=1.80)の両方において他の戦略と比較して値が小さかった。



【図 2】項目別に見た情意ストラテジー

情意ストラテジーでは、英語、スペイン語、全体あわせて「英語(スペイン語)学習日記をつけて自分の感情を書いている」の項目の平均値が低かった。また、「英語(スペイン語)を勉強しているときや使っているときに緊張しているか神経質に自分になっていると思う」も平均値が低いことから、自分の気持ちを認識するストラテジーの平均値が低かったといえる。

5. 考察

本研究では、下記の 4 点が明らかになった。①全体の傾向として、学習者は英語学習時に、スペイン語学習時に比べて学習ストラテジーを多く使っており、その中でもメタ認知ストラテジーの項目に平均値の差が顕著にみられた。②学習者は英語を学習する際には、スペイン語学習に比べて明確な目標と動機を持っていた。③英語学習時には、スペイン語学習時に比べて、オーセンティックな教材を用いて学習を行い、自ら積極的にオーセンティックな英語に触れようと試みていた。④日本人学習者は、メタ情意ストラテジーの使用度が低かった。

5.1. メタ認知ストラテジーと自律学習

英語学習時の方がメタ認知ストラテジーをよく使っていた、つまり自律学習者となり得ていた理由は、明確な目標を学習者自身が持っているためと考えられる。また、明確な目標を持っているということは、英語を学習する動機付けがしっかりしているといえる。本研究で、スペイン語学習者は、外発的動機を、スペイン語を学習し始めた理由としてあげることが多かった。竹内(2003)によると内発的に動機づけられた学習者は、メタ認知ストラテジーを多用していた。よって今回のような外発的動機を示したスペイン語学習者は、よりメタ認知ストラテジーを使用しにくいといえる。このことが、メタ認知ストラテジーに平均値の差がみられる理由の一

困であろう。

5.2. 動機付け

中学・高校生にとっては英語学習には受験という大きな目標がある。一方スペイン語には将来スペイン語を使って仕事をしたいという場合でも、当面差し迫ってスペイン語を英語ほど学習する必要はあまりないだろう。よってどうしても英語学習の方がより優先され、高い目標を持って取り組むということにならざるを得ない。これらの戦略の差は学習者自身の問題のみならず、言語教育の格差がもたらす要因も大いに存在する。

5.3. オーセンティックな教材

現在日本において、英語のオーセンティックな教材には事欠かない。英語の新聞も、英語の映画も容易に手に入る。英語話者のネイティブと出会うこともさほど難しくないだろう。しかしスペイン語に関しては、日本においてスペイン語の新聞を手に入れるのは困難であり、スペイン語の映画も数が少ない。学習言語に触れることのできる機会が動機づけ、または使用戦略に与える影響も考慮しなければならない。

5.4. 情意戦略

S2R モデルは認知戦略、情意戦略、社会文化インタラクティブ戦略の3つが相互に関係しあっているモデルである。

今回の S2R モデルでは、Oxford は情意戦略を学習者の肯定的な感情と態度を作るもの、そして動機づけを維持するもの、モニタリングするものと述べている。

学習者の使用する情意戦略の使用傾向は、自分の気持ちを肯定的にするための戦略は使うことができるが、そのために基盤となる、自分の気持ちを認識するという戦略をあまり使わない傾向にあった。これらの戦略は、S2R モデルにおけるメタ情意戦略に値する学習戦略である。

英語(スペイン語)学習日記という項目は、日本人にとってあまりなじみのない学習戦略であり、それゆえ平均値が低い結果がでた可能性もある。しかし自分の感情を認識する学習戦略である「英語(スペイン語)を勉強しているときや使っているときに緊張しているか神経質に自分になっていると思う」という項目も平均値が低かったことから、自分の感情を認識する戦略はあまり多用されないといえるだろう。

このメタ情意戦略があまり多用されない理由については、2つの理由が考えられる。まず第1に、社会文化的背景が関係すると考えられる。Isoda (2004)は、95名の日本人高校生3年生に対し調査を行い、学習者が効果的な戦略だと考えているのに、実際には使わない戦略について検討した。その理由として、「その学習戦略を実際の場面で覚えていない」、「その学習戦略を知らない」、「その学習戦略を使うのは恥ずかしい・きまりが悪い」が挙げられていた。「その学習戦略を使うのは恥ずかしい・きまりが悪い」というのは日本人学習者に特有のものであろう。Isoda (2004)では、日本人学習者が、授業内で質問の時間をとっているのに関わらず、授業後に教師に質問をしに行く状況を例に出している。これも、今回の情意戦略で平均の低かった、「英語(スペイン語)を勉強して

いるとき、自分がどう感じているか他の人に話す」という項目に通ずると考えられる。自分がどう感じているかを人に話すという行為は、日本人にとって苦手なものである可能性がある。

次に、学習の段階が関係すると考えられる。初級段階においては文法事項などがまだきちんと記憶されておらず、会話をしようとしても活用形など他に考えることが多く、自分の気持ちを考える余裕がない可能性がある。つまり、その学習戦略を実際の場面では覚えていない可能性が高い。よって、この自分の気持ちを認識するという学習戦略は、ある程度余裕がでてきた中級者段階において使用すると効果的な学習戦略といえるだろう。

齋藤(2008,2009)でもメタ認知戦略の重要性について述べている。齋藤は、メタ認知戦略をよく使う学生は、成績が上位である傾向がみられると考察している。しかし齋藤(2009)では、成績上位群は、英語学習でよく使う学習戦略をスペイン語学習でも実践しており、逆に成績下位群は、英語とスペイン語で使用する学習戦略との相関関係が低いと述べている。本研究では、成績上位群と下位群に分類して統計処理を行っていないので、単純に比較はできないが、中学・高校生に関しては、英語学習とスペイン語学習時での相関関係は齋藤(2009)の結果ほど強くなかった。このことは、中学・高校生はまだ学習歴が浅く、学習戦略を習得する途中段階であるといえる。よって、学習戦略を効果的に学習者に教えることも、今後の学習に重要なことであるといえよう。

また、本研究は、使用頻度が高く信頼性のある SILL の日本版である「言語学習戦略調査」を基にしてさらにより総合的な視点の新しい戦略モデルから学習戦略を検討した研究である。また、先行研究の少ないスペイン語教育の分野での研究であり、特に中学・高校生を対象とした研究であるという点では、独創性がある。さらに、従来、単体的にしかとらえられていなかった学習戦略を総合的な視点からとらえ、実態を明らかにしたという点に新規性がある。

SILL を使った学習戦略研究に関しては、調査の一時点での結果でしかなく、その時の全体像を把握するのみにすぎない。学習者の使用する学習戦略は、学習者の心理状態や学習段階によっても刻々と変化するものであり、長期的な縦断研究そして、より個人の内面を反映することが可能な質的研究が望まれる。

6. 結論

本研究では、SILL、S2R モデルを基盤として中学・高校生の学習戦略の特徴を検討した。今回の結果から、日本における中学・高校生の第 2 外国語としてのスペイン語学習戦略の特徴が明らかになった。やはり、英語学習とは異なる特徴が多数みられた。この研究結果をもとに、スペイン語学習者に対しては、動機付けを高めるような教育方法を試みる、オーセンティックな教材を手に入れ、学習者に提供する、また授業外でもスペイン語にふれることができるような環境を整えるなどが、効果的なスペイン語学習方法として考えられる。今回の研究を足掛かりとして、より詳細な全体の傾向を把握するため、また今後のスペイン語学習および教育における自律学習を促進する学習戦略を身につけるための教育プログラム構築に活用していきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたりご助言をいただきました愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科教授の堀田英夫先生、愛知県立大学外国語学部英米学科教授の広瀬恵子先生、愛知県立大学外国語学部英米学科准教授の池田周先生に心より感謝申し上げます。また、質問紙に快く協力していただいた方々および実施にあたりご協力いただいた先生方に心より感謝致します。

参考文献

- 英保すずな(2006)「第二言語環境における学習ストラテジーの使用：自律的学習の実現をめざして」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』16、99-110.
- Dornyei, Zoltan(2010) *Questionnaires in Second Language Research*, Routledge.
- Gallego, Emilio (2006)「スペイン語の読解ストラテジーとその能力について—画像を含んだ教材が及ぼす影響」『清泉女子大学人文科学研究紀要』27、31-49.
- 後藤・石井・浜・岩村 (2010)「高等学校におけるスペイン語教育の現状と展望」『早稲田教育評論』24 (1)、45-62.
- Hiromori, T. (2004) Motivation and language learning strategies of EFL high school students— A preliminary study through the use of panel data. *JACET Bulletin*, 39, 31-41.
- Horwitz, E. K.(1987) Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden&J. Rubin (Eds.), *Learner strategies in language learning* , 119-129.
- Isoda,T.(2004) Exploring learners' thoughts and attributes affecting learning strategy use. *JACET Bulletin*, 39, 1-14.
- 木村啓子 (2007)「英語圏滞在が英語学習ストラテジーに及ぼす影響：短期海外研修は英語学習ストラテジーを向上させるか」『尚美学園大学総合政策研究紀要』13、1-12.
- 小嶋・廣森・尾関 (2010)『成長する英語学習者 学習者要因と自律学習』大修館書店
- Oxford, Rebecca L. (1990) *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*, Newbury House, Oxford.
- (2011)*Teaching and Researching Language Learning Strategies*, Pearson Education Limited.
- オックスフォード, レベッカ L.著、宍戸通庸・伴紀子訳 (1994)「言語学習ストラテジー：外国語教師が知っておかなければならないこと」凡人社
- 朴一美 (2010)「学習ストラテジーと韓国人日本語学習者要因との関係」『人文社会科学論叢』19、75-90.
- 齋藤華子 (2008)「初級スペイン語学習者の学習ストラテジー調査」『清泉女子大学紀要』56、17-30.
- (2009)「初級スペイン語学習者の学習ストラテジー調査：英語学習ストラテジーとの関連」『清泉女子大学紀要』57、33-46.
- 齋藤ひろみ (1996)「日本語学習者と教師のビリーフ—自律学習に関わるビリーフの調査を通して—」『言語文化と日本語教育』12、58-69.

佐藤敏子 (2006)「学習信条と学習効果:BALLI を使用した調査 “The Beliefs about Language Learning and the Student’s Use of Effective Language Learning Strategies”」『研究紀要つくば国際大学』12、1-16.

竹内理(2003)『より良い外国語学習法を求めて 外国語学習成功者の研究』松柏社

Wen, Qiufang&Johnson, Robert Keith(1997)L2 learner variables and English achievement: A study of tertiary-level English majors in China. *Applied Linguistics*, 18, 27-48.

本論文は、筆者が2011年3月11日に行われた第8回言語教育研究会において行った共同発表「学習ストラテジーと自律学習ー英語・スペイン語学習者に対する調査を通してー」を基に新たな観点で大幅に加筆したものである。

APPENDIX

質問項目一覧

質問項目は以下のとおりである。

記憶ストラテジー

- 1 英語 (スペイン語)を勉強するときは、すでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える
- 2 覚えやすいように文の中で新しく覚えた単語を使ってみる
- 3 単語を覚えるために、新しい単語の音とその単語のイメージや絵を結びつける
- 4 新しい単語を覚えるときは、その単語が使われる場面を心に描いて覚える
- 5 新しい単語を覚えるのに、似た音の単語を集めて、または関連付けて覚える
- 6 新しい単語を覚えるのにフラッシュカードを使う
- 7 新しい単語を身体で表現して覚える
- 8 授業の復習をよくする
- 9 新しい単語を覚えるのにその単語が書いてあった本のページ、黒板などの位置を記憶しておく

認知ストラテジー

- 10 新しい単語を数回書いたり言ったりする
- 11 英語 (スペイン語)のネイティブスピーカーのように話すよう心がける
- 12 英語 (スペイン語)の発音練習をする
- 13 知っている単語をいろいろな文脈で使ってみる
- 14 積極的に英語 (スペイン語)で会話を始める
- 15 英語 (スペイン語)のテレビ番組や英語 (スペイン語)の映画を見る
- 16 英語 (スペイン語)で読むのが楽しい
- 17 英語 (スペイン語)でメモ、メッセージ、手紙、メールを書く
- 18 英語 (スペイン語)の文章をまずざっと読み、もういちど、前に戻って注意深く読む
- 19 英語 (スペイン語)の新しい単語に似た言葉を日本語の中から探す
- 20 英語 (スペイン語)の中にパターンを見つけようとする

- 21 難しい英語（スペイン語）の単語は分解して意味を知ろうとする
- 22 文を一語一語訳していくことはしないよう心がける
- 23 読んだり書いたりしたことを英語（スペイン語）でまとめる

補償ストラテジー

- 24 知らない単語を理解しようと推測する
- 25 英語（スペイン語）での会話中適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う
- 26 英語（スペイン語）で適切な語が分からないとき自分で新しい単語を作る
- 27 英語（スペイン語）を読むとき、一語一語調べない
- 28 他の人が次に英語（スペイン語）で何と何か推測しようと心がける
- 29 英語（スペイン語）の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う
- 30 いろいろな方法を見つけて英語（スペイン語）を使うよう心がける
- 31 自分の英語（スペイン語）の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する
- 32 他の人が英語（スペイン語）を使っているときは集中する
- 33 優秀な英語（スペイン語）学習者になるためにはどうしたらよいかを考える
- 34 スケジュールを立て、英語（スペイン語）の学習に十分な時間をあてる
- 35 英語（スペイン語）で話しかけることができる人を探す
- 36 できるだけ英語（スペイン語）で読む機会を探す
- 37 英語（スペイン語）の能力を高めるための明確な目標がある
- 38 自分の英語（スペイン語）学習の進歩について考える

情意ストラテジー

- 39 英語（スペイン語）を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心がける
- 40 間違いを恐れず英語（スペイン語）を使うよう自分をはげます
- 41 うまくいったとき、自分をほめる
- 42 英語（スペイン語）を勉強しているときや使っているときに緊張しているか神経質に自分になっていると思う
- 43 英語（スペイン語）学習日記をつけて自分の感情を書いている
- 44 英語（スペイン語）を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す

社会的ストラテジー

- 45 英語（スペイン語）が分からないとき、ゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもら
- 46 話しているとき、英語（スペイン語）のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもら
- 47 他の人と英語（スペイン語）を練習する
- 48 困ったとき、英語（スペイン語）のネイティブ・スピーカーに助けを求める
- 49 英語（スペイン語）で質問をする
- 50 英語（スペイン語）圏の文化を学ぶよう心がける

自律

- 51 最も効果的な学習方法は先生が知っている（逆転項目）

- 52 自分たちでその日の学習内容を決めるのは効果的である
- 53 たとえ自分のやり方と違っていても先生のアドバイスに従うべきだと思う (逆転項目)
- 54 自分一人でも英語 (スペイン語) の学習はできる
- 55 授業を管理するのは先生である (逆転項目)
- 56 私が英語 (スペイン語) 学習で進歩がなかったら先生のせいだと考える (逆転項目)
- 57 生徒の評価は先生がすべきである (逆転項目)
- 58 英語 (スペイン語) の授業の活動はクラスが皆同じことをする方がよい (逆転項目)

Las estrategias en el aprendizaje del español como segunda lengua extranjera en los estudiantes de instituto en Japón

Yuri Yokoyama
Master en Estudios Internacionales

(Resumen)

Este artículo trata sobre las estrategias en el aprendizaje del español como segunda lengua extranjera, en los casos de los estudiantes de español en institutos japoneses.

El objeto de este artículo es analizar estas estrategias usando el cuestionario SILL de Oxford. Más adelante se estudiarán los resultados siguiendo cuatro criterios:

- 1) El aprendizaje autónomo.
- 2) La motivación de los estudiantes.
- 3) Comparaciones con estrategias en el estudio del inglés.
- 4) Análisis del conjunto.

Del análisis se desprenden los siguientes 4 puntos:

- 1) Se produce una tendencia en el estudiante a utilizar un abanico más amplio de estrategias cuando el inglés es el idioma que se está aprendiendo. Este aspecto resalta mucho en la estrategia cognitiva.
- 2) La motivación en el estudiante también es un criterio que se tiene en cuenta en el análisis. Comparando el aprendizaje del inglés con al aprendizaje del español, los estudiantes tienen metas más específicas y mayor motivación cuando estudian el primero.
- 3) Los estudiantes de inglés tienden a usar más material auténtico del país de origen que los estudiantes de español.
- 4) Mediante el análisis del nuevo modelo S2R de Oxford, sabemos que la utilización de estrategias afectivas y meta-afectivas no están extendidas entre los estudiantes. Una de las razones sería el entorno cultural en la propia sociedad japonesa.

Las investigaciones sobre la enseñanza del español en los estudiantes en edades previamente mencionadas son aún escasas. Con el presente análisis, se propone una nueva aproximación a la enseñanza del español en Japón.